

イエイツとアイルランド

松島正一

(1)

今日はこれからアイルランドの詩人ウイリアム・バトラー・イエイツの話をしますが、彼の生涯をアイルランドの歴史と重ね合わせながら、話ができれば幸いです。

日本では未だにアイルランドは英国の一部とと思っている人も多いようです。北アイルランドというのは英国です。英国の正式名である連合王国は英語では The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland と言います。

イエイツは一八六五年生まれですから、まだアイルランドという国家は存在していません。アイルランドの独立の歴史をたどると、アイルランド自由共和国 (Irish Free State) 成立は一九二一年、新憲法を制定して国名をエイル (Eire) と改めたのは一九三七年、第二次世界大戦が終わって四年後の一九四九年に英連邦を離れアイルランド共和国 (The Republic of Ireland) になりました。ところで、第二次世界大戦の際、アイルランドが中立を保ったことは意外と知られていません。日本には英文科は沢山ありますが、アイルランドの講座はやっ

最近になって神戸大学にできたという話を聞いています。

みなさんは『マデイソン郡の橋』(ロバート・ジェームズ・ウォーラ著)というアメリカの小説をご存じのことと思います。日本でも今年(一九九九年)の秋、十朱幸代さんの主演で劇が上演され、評判になりました。

『マデイソン郡の橋』は写真家ロバート・キンケイドと農家の主婦フランチェスカの四日間だけの恋を扱っています。人生のなかばに差しかかった男女の四日間だけの恋、その恋を二十四年間だれにも話さずに自分の心にだけしまい、日記に残して死んでいったフランチェスカ。この話が著者も予想しなかったほど多くの読者を惹きつけ、映画にもなり、芝居にもなったのは、記憶に新しいことと思います。

さて、この二人の出会いの小道具としてイエイツの詩が使われているのです。村松潔訳(文春文庫)で引用します。

両手をリーバイスのポケットに入れ、左の腰のあたりにカメラをぶらさげて、彼は空を見上げていた。
「月の銀のりんご 太陽の金のりんご」中音域のバリトンで、彼はプロの俳優みたいに言った。

彼女はロバートの顔を見た。「W・B・イエイツの『さまよえるエーングスの歌』ね」「そのとおり。いいものですよ、イエイツは。リアリズム、無駄のなさ、官能性、美しさ、魔力。アイルランド系の血を引くわたしにはぴったりなんです」

そう、ロバートはアイルランド系アメリカ人であったのでした。現在、アイルランドの人口は約三百六十六万人で、海外にはその十倍はいると言われています。多くのアイルランド人がアメリカに渡りましたが、その

理由の第一はアイルランドの飢饉でした。とりわけ一八四五年から翌年にわたる大飢饉では、実に百五十万人ものアイルランド人がアメリカに移住したと言われています。

先の引用にある「月の銀のりんご 太陽の金のりんご」が出てくるイエイツの『さまよえるエーンガスの歌』はこう始まります。

焔が頭に燃えていたので

私は榛の林へ行つた。

はしばみの小枝を剪り皮を剥ぎ

苺の実を糸につないだ。

そして白い蛾が閃き、

蛾に似た星が瞬く時、

小さな流れに苺の実を落し

銀の鱒を釣った。

白い蛾が飛ぶ時、また蛾と見間違えるほどの星が瞬く時、エーンガスは見失われた乙女を求めてはしばみの森に出かけるのです。

第一連にある「白い蛾が羽を広げるとき」の言葉が二人のメッセンジャーとなつて、ロバートはフランチェスカの夕食への招待に応じます。

小鱒を床の上に置いて

火を赤く燃そうとすると

何かが床の上でささと鳴り

だれかが私の名を呼んだ。

小鱒は髪に林檎の花を挿した

輝く乙女に変身し

私の名を呼び駆け出して

煌めく空に消え失せた。

エーリングガスが捕らえた銀の鱒は、髪に林檎の花をつけた乙女となって、エーリングガスの名前を呼びながら消えてしまうのです。

フランチェスカは「ナポリの窓から身を乗り出して、いつかやってくる遠くの恋人を夢見てる」イタリア娘でした。イタリアの若い男の大半は、戦死するか、負傷するか、さもなければ、捕虜収容所にいるか、体をこわしていたのです。そんなところにアメリカ人のリチャードが現れたのです。そして彼女は復員軍人の妻、戦争花嫁としてアイオワの田舎町にやって来ます。そこは教師が足りない土地でしたので、彼女は高校で英語を教えたりしました。

窪地や丘地をさまよって
年老いたこの身であるが

見つけよう乙女の行方を

そしてその唇に接吻し手をとって

まだらな長い草をわけ

時の減びる去るまで摘みとろう

月の銀のりんごを

太陽の黄金のりんごを。

フランチェスカはかつて教室で「太陽の金のりんご」を読んだことがありました。その授業でこんなことがあったのです。マシュー・クラークという生徒が隣の少年の顔を見て、両手をカッパにして女性の胸に被せるような真似をしたのでした。そうして彼らはクスクス笑いだし、後列の女生徒たちは顔を赤らめるといったようなことがありました。

フランチェスカは夫にも子供たちにも恵まれています。何不自由ない、幸せな生活であるはずです。しかし今、四十五歳の彼女は現在の生活が少女のとき夢見ていた生活ではないことを自覚しているのです。

この詩『さまよえるエーンガスの歌』はイエイツの初期の特徴をよく表しています。それは夢見がちな神秘的ロマン主義者、『イニスフリーの湖島』でこう歌う若きイエイツなのです。

I will arise and go now, and go to Innisfree,

And a small cabin build there, of clay and wattles made:

いざ立つて私は行こう、あのイニスフリーへ

そして、泥と小枝で造ったささやかな小屋をそこに建てよう。

(2)

現在、アイルランドの第一公用語はゲール語、第二公用語は英語となっています。アイルランドは六百年以上にわたって英国の支配下にあつたため、国民の大多数は英語を使用しています。

イエイツを考える際に「アイルランド文芸復興」との関係が重要です。一九世紀末四半世紀に始まり一九二〇年代まで栄えたアイルランドの民族主義と文化の復興を「アイルランド文芸復興」といいます。この復興を育んだ本の中にはS・ファアガソンの『西ゲールの歌』やダグラス・ハイドの『コナツハトの愛の歌』のような詩、民話、アイルランドの伝説の翻訳と再話がありました。ところでハイドはのちにアイルランド初代大統領に就任した人です。

この運動はゲール語復興運動でもありました。一八九三年ハイドを中心としてゲール語同盟が結成されました。支配者の言語である英語の使用をやめて、民族の言語であるゲール語に戻ることが国民精神の復興に必要であると信じたからです。しかしこのゲール語復興運動は最初から大きな矛盾を抱えていました。もともとゲール語を使っていた人は極く僅かでしたし、ゲール語自体がさまざまな方言に分かれていたからです。

イエイツもその中心となつて一八九九年設立された「アイルランド文芸劇場」は結局「アベイ座」になり、ここで、イエイツの詩劇が上演されましたが、一九〇七年シングの『西の国の人気者』をめぐつては警官が出勤する騒ぎになりました。また一九二六年イースター蜂起を扱ったオケイシーの『鋤と星』の上演の際も大変な騒ぎとなりました。アベイ座では、ジョージ・バーナード・ショーを初めとして、アイルランド人による、アイルランドを主題とした劇が上演されました。

イエイツはグレゴリー夫人の財政的な援助を受けながら、同志らと新しいアイルランドの芸術のあり方を追及していきました。彼はアイルランドの民間伝承、神話などを掘り起こし、『キャスリーン伯爵夫人』『クフリンの死』などの作品を書き、上演しました。また、彼はエズラ・パウンドを通じて日本の能に出会い、『鷹の井戸』『骨の夢』などの能の手法を取り入れた劇を書いています。

これらの民族主義的運動を担つたのは、イエイツもそうなのですが、アングロ・アイリッシュが多かつたことに気づきます。イエイツもグレゴリー夫人も支配者階級に属しますが、そもそもアイルランドの知識階級はイギリス本国からやってきた人々でした。

さて、ここでイエイツの「宿命の女性」モード・ゴンの話をしておきましょう。イエイツは一八八九年二十三歳の時、突然現れたモードを熱烈に恋します。モードは彼より一歳半年上の女性で、すでに彼女にはバリの恋人がいました。内気な彼の純潔な愛情は長く続きましたが、モードが現実的な活動家であつたため、イエイツも祖国アイルランドの文芸復興という実際問題に引き込まれることになりました。

モードの美しさはタブリン城の夜会で彼女と会つたオズカー・ワイルドが「実にチャーミングだ。まるで睡蓮のようだ」と言つたという話が残っているくらいです。

イエイツは『回想録』で「生きた人間の中に、これほどの美しさを見ることなど思いもよらなかつた。有名な絵画か、詩か何か昔の伝説から抜け出してきたようだつた。りんこの花のようなかんばせ、しかも顔といい、肉体といい、ブレイクが「年老いてなお、いささかも変わることもなきゆえに最高の美である」と叫んだ輪郭の美しさを具え、まるで神の化身とも思えるような、堂々とした身の丈であつた」と述べています。

モードに結婚を迫るイエイツ対して彼女は「あなたのご自分の不幸の中から美しい詩をお作りになるのだから、あなたはお幸せです。結婚なんて退屈なものですよ。詩人は結婚してはいけません。世界の人は、あなたと結婚しなかつたことを、私に感謝してくれるでしょう」と言います。イエイツにとってモードは「運命の女」だつたのです。

一九〇三年モードはパリでジョン・マクブライドと二度目の結婚をします。時に、モード三十五歳、マクブライド三十七歳でした。モードはこの結婚を電報でダブリンのイエイツに知らせます。イエイツは大きなショックを受けます。

モードとマクブライドの結婚は失敗でした。マクブライドとモードとの間には二人の子供が出来ます。息子シヨーン、この人は後に国際アムネスティの所長となり、一九七四年アイルランドではイエイツに次いでノーベル賞を受賞します。

イースター蜂起で捕らえられたマクブライドは処刑され、モードは晴れて独身となります。イエイツは再度、モードに求婚します。当然のことながら断られます。すると彼はモードの娘イーストルトに求婚するのです。これも断られます。イーストルトは十七歳の美貌の青年と駆け落ちしてしまいます。

翌年一九一七年、五十二歳の男イエイツは、これ以上結婚を延ばしたら子供が出来ないと思つて、心霊研究

の友であつたジョルジー・ハイドリリーズと結婚します。イエイツの望みどおり一九一九年に女子、一九二二年には男子が誕生します。

(3)

一九一六年のイースターは四月二十四日(日曜日)でした。翌日のイースター・マンデー(イギリスでもアイルランドでもバンク・ホリデーという国民の休日である)、アイルランドは武装蜂起をしたのでした。アイルランド共和国同盟(IRB)に率いられた七百人の急進派は即時独立を要求し、アイルランド共和国を宣言し、ダブリンで市街戦を引き起こし、オコーネル通りの中央郵便局に立て籠もり、ここを司令部としました。

中央郵便局の前で、パトリック・ピアス(一八七九—一九一六)が共和国宣言を読みあげました。これが「アイルランド共和国臨時政府 アイルランド国民に告ぐ」です。高田久壽著『炎の美女革命家モード・ゴン——イエイツとアイルランド独立運動をめぐる』(誠文堂新光社)に訳がありますので、それを読みます。

アイルランド国民各位よ！神の名と国民がその古き伝統を受け継いで来た過ぎ去つた幾世代の名において、アイルランドは、我らを通じ、その子らを国旗のもとに招集し、自由のために闘うのである。

アイルランドは、その秘密革命組織アイルランド共和国同盟を通じて、わが国の青年を組織し訓練して来たり、かつまた公然たる軍事組織であるアイルランド義勇軍、およびアイルランド市民軍を通じて、その規律を完璧ならしめ、決然としてその成果を示す好機の到来を期していたが、今こそその機会はきた。

アメリカ亡命中のアイルランド同胞、およびヨーロッパにおける勇敢なる同盟国の指示を得、あくまで己の力に依存しつつ、アイルランドは勝利の確信をもってここに一撃を加えんとするものである。

アイルランドはアイルランド国民が所有するものであり、アイルランドの運命は、なんらの束縛なく自ら支配し、自らの主権を有し、なんびともこれを侵すべからざる権利を有するものであることを宣言する。外国人および外国政府による長きにわたるその権利の侵害も、アイルランド人を絶滅せしむる以外は、我らの権利の灯を消し去ることは期しえないのである。あらゆる世代を通じ、アイルランド国民は、自らの主権を主張して来た。過去三〇〇年間に六たび、アイルランド国民は武力に訴えこれを主張して来た。いま、その基本的権利に立脚し、再び武力をもって世界の前にその権利を主張し、ここにアイルランド共和国を独立した主権国として宣言するものである。ここに我らアイルランドの大義のために、その福祉と、列国に伍する地位の確保のために、我々の生命および武器を取って立ち上がった同志の生命を捧げること

を誓う。

アイルランド共和国は、あらゆるアイルランド人が忠誠を捧げるのに値するものであり、さればこそ、その忠誠を要求する。共和国は宗教の自由、市民の自由を、またあらゆる市民に対する平等の権利と機会を保障し、あらゆる若者を平等に養育し、過去において少数の者を大多数の者から分離して来た外国の政府による巧妙なもろもろの差別を忘れ去らしめ、全国民の、そしてまたあらゆる地域の幸福と繁栄を推進する決意であることを表明する。

アイルランド全国民を代表し、各位の参政権によって選出された恒久的国民政府の好機を、我らの武力によつてもたらすまで、ここに結成された臨時政府は、国民のために共和国の民事ならびに軍事権を行使

The 1916 Proclamation

POBLACHÁN NA H EIREANN.
THE PROVISIONAL GOVERNMENT
OF THE
IRISH REPUBLIC
TO THE PEOPLE OF IRELAND.

IRISHMEN AND IRISHWOMEN: In the name of God and of the dead generations from which she receives her old tradition of nationhood, Ireland, through us, summons her children to her flag and strikes for her freedom.

Having organised and trained her manhood through her secret revolutionary organisation, the Irish Republican Brotherhood, and through her open military organisations, the Irish Volunteers and the Irish Citizen Army, having patiently perfected her discipline, having resolutely waited for the right moment to reveal itself, she now seizes that moment, and, supported by her exiled children in America and by gallant allies in Europe, but relying in the first on her own strength, she strikes in full confidence of victory.

We declare the right of the people of Ireland to the ownership of Ireland, and to the unfettered control of Irish destinies, to be sovereign and indefeasible. The long usurpation of that right by a foreign people and government has not extinguished the right, nor can it ever be extinguished except by the destruction of the Irish people. In every generation the Irish people have asserted their right to national freedom and sovereignty; six times during the past three hundred years they have asserted it in arms. Standing on that fundamental right and again asserting it in arms in the face of the world, we hereby proclaim the Irish Republic as a Sovereign Independent State, and we pledge our lives and the lives of our comrades-in-arms to the cause of its freedom, of its welfare, and of its exaltation among the nations.

The Irish Republic is entitled to, and hereby claims, the allegiance of every Irishman and Irishwoman. The Republic guarantees religious and civil liberty, equal rights and equal opportunities to all its citizens, and declares its resolve to pursue the happiness and prosperity of the whole nation and of all its parts, cherishing all the children of the nation equally, and oblivious of the differences carefully fostered by an alien government, which have divided a minority from the majority in the past.

Until our arms have brought the opportune moment for the establishment of a permanent National Government, representative of the whole people of Ireland and elected by the suffrages of all her men and women, the Provisional Government, hereby constituted, will administer the civil and military affairs of the Republic in trust for the people.

We place the cause of the Irish Republic under the protection of the Most High God, Whose blessing we invoke upon our arms, and we pray that no one who serves that cause will dishonour it by cowardice, inhumanity, or rapine. In this supreme hour the Irish nation must, by its valour and discipline and by the readiness of its children to sacrifice themselves for the common good, prove itself worthy of the august destiny to which it is called.

Signed on Behalf of the Provisional Government,

THOMAS J. CLARKE.

SEAN Mac DIARMADA.

THOMAS MacDONAGH.

P. H. PEARSE.

EAMONN CEANNT.

JAMES CONNOLLY.

JOSEPH PLUNKETT.

Trinity College Library Dublin

共和国宣言「アイルランド共和国臨時政府 アイルランド国民に告ぐ」

するであらう。

我々は、アイルランド共和国の大義を、いと高き神の加護に委ね、その祝福を、我らが武運の上に賜わらんことを乞い希うものである。かつまたこの大義に奉仕する者はなんびとも、卑劣さ、非人道さ、また略奪などの行為により、神の福音を汚すことなきやう我らは祈る。この高揚せる時にあたり、アイルランド国民は、その勇氣と規律により、また、若者らの即応力により、共通の善のために己を犠牲にし、今こそ求められている尊厳なる運命にふさわしい国家たることを示さなくてはならない。

そして、署名があります。トマス・J・クラーク、シヨーン・マクダーモット、トマス・マックドナー、P・H・ピアス、イーモン・キャンント、ジェイムズ・コノリー、ジョセフ・ブランケットの七名です。

これを機に、従来の市民軍、義勇軍、アイルランド共和国同盟は一体となり、新たにIRAとして発足し、パトリック・ピアスがその首班として任命されました。

戦闘は一週間続きましたが、土曜日ピアスとコノリーはイギリス軍に投降し、「反乱」は鎮圧されます。この反乱に参加したアイルランド人は、男女合わせて九百名足らずでしたが、イギリスの兵隊や警察官は五千名に達したと言われています。

軍事会議では男性百二十名、女性一名が有罪の判決を受け、指導者たち十七名は死刑の判決を受けました。五月初め、まず最初にピアスが処刑され、続いてトマス・クラーク、トマス・マックドナー、シヨーン・マックブライド、シヨーン・マクダーモット、ジェイムズ・コノリーが処刑されたのです。

かつてモード・ゴーンの夫であったジョン・マックブライドはボーア戦争の際、アフリカでアイルランド部

隊を率いてイギリスに反抗した罪状も加味された処刑でした。彼は、銃口の前で目隠しをされるのを拒んだといわれています。彼はこの処刑によって、アイルランドの国民的英雄、また殉教者として名を残すことになりました。

アイルランドが蜂起した時、モードは何も知らずにノルマンデイの別荘でイースター休暇を楽しんでいました。そこに蜂起のニュースが入ってきて、彼女の活動家仲間が参加し、逮捕されたことを知ります。彼女は一刻も早くダブリンに駆け付けたかったのですが、別居中とはいえ、法律上はジョン・マクブライド夫人ということで、イギリスのみならずアイルランドへのパスポートを発行してもらえませんでした。

この時、イエイツはロンドンにいました。蜂起を知った彼の思いは実に複雑なものであったことでしょう。彼はのちにこの蜂起を詩にしています。一九一六年九月二十五日の制作月日が入っているこの詩は、私家版として二十五部印刷されましたが、発表は一九二〇年まで待たなければならなかったといういわくつきの詩であります。

私が彼らに出会ったのは夕暮れ時、

彼らは勘定台や事務机を離れ、

十八世紀風のくすんだ家並みの間を

生き生きとした顔でやってきた。

すれ違いながら軽く会釈するか

丁寧な何気ない言葉をかけ、

また時には、しばらく足をとめて

丁寧な何気ない言葉をかけた。

まだそれもろくに終わらない先に、もう

クラブの暖炉を囲んで仲間を

喜ばせてやるため、その男を

茶化す陰口やかからかいを考えていたのだった。

彼らも私も、道化服をまとう世を生きる

しがない身と思えばこそだった。

このような日常を送っていた人たちが、アイルランド独立のために立ち上がったのです。そして彼らは蜂起によって変わり、変わることによって、そこに「恐ろしい美」が誕生したことを詩人は認めざるをえなかったのです。

すべてが変わった、すっかり変わった。

恐ろしい美が生まれたのだ。

次に、語り手であるイエイツは、蜂起に参加した人々をあげていきます。まず、マーキユヴィッツ伯爵夫人コNSTANCS(一八六八―一九二七)についてこう描いています。

あの女の日中は

愚かな慈善にすぎし、

夜は夜で、きいきい声を張り上げて

議論に費やされたのだ。

かつて彼女が若々しく、美しく

馬で兎狩りの獵犬を追っていたころの

彼女の声に勝る美声があるだろうか。

彼女は後に詩集『螺旋階段、その他の詩』の巻頭「イーヴァ・ゴオルブースとコン・マーキュヴィッツを偲びて」でも歌われています。彼女はこのイースター蜂起事件では、女性ゆえに死刑を免ぜられ無期懲役を言い渡されます。アイルランドでは貴族階級と中流階級の間には越えられぬ壁がありました。中流階級出身のイエイツにとって、国内第一の女性騎手という評判であった彼女は、伝統的なアイルランドの貴族的女性の代表であったのです。

詩は次に、何人かの人々をあげます。まずダブリンに男子学校を創設したパトリック・ピアス、

こちらの男は学校経営をしたことがあり、

翼ある天馬にもまたがった詩人であった。

彼が設立した学校ではゲール語のみで教え、アイルランドの古代の英雄クーハランの精神を弟子に教えこむことが校風とされてきました。また、ピアスは詩人としてゲール語によるすぐれた詩を多く残しています。

次に「その援助者にして友人」トマス・マグドナ(一八七八—一九一六)、

こちらのもう一人は彼の協力者、友人で

次第に才能が開きかけていた。

生きていたら最後には名声をつかんだであらうに。

すばらしい感受性に恵まれた性質と、

大胆で甘美な思想を持つと見えたから。

イエイツは恋敵ジョン・マクブライドに対しては最大限の悪態をつきます。しかしジョンは「かけがいのない友人」であつたのです。

さらにもう一人は呑んべえで

見栄っ張りの無骨者だと思つていた。

かけがえのない私の親しい友たちを

手酷い目にあわせた奴だったが、

この男もこの歌の中に数えあげよう。

彼もまた、人生の即席喜劇の中の

自分の持役を降りてしまった人なのだから。

彼にも番がめぐってきて、変わったのだ。

すっかり別人になってしまったのだ。

恐ろしい美が生まれたのだ。

第三連において「石」のイメージが出てきます。ここでの「石」はその死によって人間的偉大性にまで生まれ変わる人々の「恐ろしい美」を象徴しています。

夏も冬も年中、一つの目的だけを

追う者たちの心は、魔法にかかって

一つの石と化し、生きた水の流れを

掻き乱すように思われる。

・
・
・
・

刻一刻を彼らは生きる。

石は一切の真つ只中にある。

しかしこのすぐ後で、「石」の意味は逆転され、石は硬直したものであるのです。

あまりにも長く犠牲は

人の心をときには石にしかねない。

彼らの死は「犬死」だったのでしょうか。いや、そんなことは決してありません。彼らは「夢」を抱いて死んでいったのですから。

英国は、いろんなことがあったけど、

結局は信義をまっとうするかもしれないのだから。

彼らの抱いた夢が私にはよくわかる。

夢を見て死んでいったことがよくわかる。

あまりにも激しく愛に燃え、血迷って

死んだとしたら、それもよいではないか。

最後に歴史の証人として、詩人は墓碑銘として死んだ仲間の四人の名を挙げます。

私は詩に書き留めよう——

マクドナ、マクブライト、

コノリー、そしてピアスは

いまでも、また、やがての日にも

緑まとう祖国の至るところで

変化している。すっかり変化している。

恐ろしい美が生まれたのだ。

市民軍を率いて参加し、中央郵便局での籠城戦の指揮をとったのはジェイムズ・コノリー(一八七〇―一九一六)でした。

現在、ダブリンのキルメイナム監獄が一般に開放されています。ここは一七九五年、英国に反して革命を企てる闘志たちを捕らえ収監するために建てられました。一八〇三年の反乱の指導者ロバート・エメットは、公衆の面前で絞首刑となりました。一九一六年のイースター蜂起で逮捕されたピアスやコノリーらもここに収容され処刑されました。最後の囚人となったのは、首相そして大統領となったイーモン・デ・ヴァレラでした。

ダブリンに行きました時、この監獄を見学しました。ガイデッド・ツアーに参加しないと監獄の内部は見学できませんので、ツアーに参加しました。ツアーはカトリックのチャペルから始まります。一九一六年五月四日、イースター蜂起のリーダーの一人であったジョセフ・プランケットが、同じく収監されていたグレイス・ギフォードと結婚式を挙げたのは、このチャペルでした。武装したイギリス兵の見守るなか、式は十三時三十分に行われ、プランケットはその二時間後に銃殺刑に処されます。二人は十分間だけ一緒にいることを許され

たそうです。

このチャペルで三十分あまりイースター蜂起の記録映画を見せられ、それから監獄の中を見学しました。ガイドは囚人たちの落書きも説明してくれました。ツアーは中庭で終了しましたが、コノリーが銃殺刑の前に椅子に紐で縛られていたのはここでした。イースター蜂起の時代とは無縁の、平和な時代に育った若い女性がガイドであったことが印象的でした。

(4)

詩人としてのイエイツは世紀末の風土から出発し、現実を厳しい目で見つめることを通して大詩人となりました。彼の詩人としての生涯は自己を否定しながら新たな自己を作り上げていく過程でありました。そして彼の詩の世界は、イエイツだけの世界ではなく、個人を越えた全人類を包み込むような世界であると言えます。

イエイツの生涯にわたる苦闘は、芸術家であり続けるということが芸術家を越えることを教えてくれます。その彼が作品の中でまず出かけたのは、芸術の都としてのビザンティウムでした。一九二六年秋の作である『ビザンティウムに船出して』は、六十一歳の詩人の目指すべき土地を教えてください。

この詩でのビザンティウムは現実のそれというよりは、ユステイニアス一世時代の黄金時代のビザンティウムです。詩はこう始まります。

あれは老人にふさわしい国ではない。

腕組み交わす若人たち、木立の小鳥たち、

——これら、やがて死ぬべき族——は歌をうたう。

鱒の遡る滝つ瀬、鯖の群がる海、

魚、獣、鳥は、これら一切は夏じゅう頌め称える、

世に生まれ、生まれ、死ぬものは何であれ。

あの官能の楽のしらべの虜となって、すべては

老いることのない知性の記念碑を蔑ろにする。

詩人は官能の世界を否定しようとしながらも、官能の世界が持っているエネルギーを抗し難く思っているのです。

老いの身は、くだらぬ代物で、

棒切れにかかった襤褸にすぎない、

魂が手を打って歌わず、また、やがて、滅ぶべき衣を着けた

一切の襤褸のために、いや高く歌わなければ。

しかも魂が歌を学ぶには、魂自身の壮麗さを刻んだ

記念碑を究めるよりほかに手だてはない。

こういふわけで、大海に船出し

聖なる都ビザンティウムへとやって来たのだ。

詩人は「聖なるビザンティウム」にやってきたのですが、ビザンティウムの住人にはなりきれないのです。第三連では、詩人は火による浄化を願うのです。

おお、黄金モザイクの壁にいるがごとく、

神の聖なる焰の中に立ちつくす賢者たちよ。

聖なる焰から出て、環をなして舞い、

わが魂の歌の師となせたまえ。

わが情念を焼きつくしたまえ。欲望に病み

死を免れぬ動物に縛りつけられた情念は、

おのれが何物かを知らぬのだから。願わくは

我が身を永遠の技芸の中に組み込みたまえ。

詩人は時間を越えて、おのれを「永遠の技芸の中に組み込む」ことを祈願します。最終連では時間を越えるものとは黄金の鳥であることがわかります。

ひとたび自然から出たからには、決してわが身を

いかなる自然の形から作ることはしないで、

ただ願うのは、ギリシアの金細工師が、うつらうつらの皇帝を

眠らすまいと、鎚で延ばした黄金、また黄金の七宝で

作り上げたのに似たあの形をとることだ。

あるいは黄金の枝に止まって

ビザンティウムの諸侯や妃に歌ってあげよう、

過ぎしこと、過ぎゆくこと、来たるべきことなどを。

詩人イエイツは作品を通して変身することを願ったのですが、彼の希求はかありませんでした。

『ビザンティウムに船出して』制作から四年後、一九三〇年九月再び、同じテーマの『ビザンティウム』を書くこととなります。『ビザンティウム』はこう始まります。

昼の不浄のイメージは退き、

皇帝の醜いどれ兵士は眠りについた。

夜の反響鳴りをしずめ、大伽藍の銅羅が鳴り止むと、

夜の放浪者の歌声もない。

星々にあるいは月に照り映えるドームは侮蔑する、

人間のこともすべてを、

いつさいの、まったき錯乱を、

人間の血に流れる狂暴と汚辱を。

ここで描かれるビザンティウムは世俗を超えた聖なる都なのです。そして、第二連では死が暗示されます。

眼前を一つのイメージが漂う。人か影か。

人かと見れば影、影かと見ればイメージ。

ミイラ麻布に包まれた冥府の糸巻は、

曲がりくねった小道を捲き戻すのか。

湿りもなく息もはかない口は、

息づかいさえしない者たちを呼び招くのか。

私はこの超人に歓喜の声をあげる。

私はこれを「生中の死」「死中の生」と呼ぼう。

第三連においては、ビザンティウムの黄金細工師の芸術の永遠性が歌われています。

奇蹟か、鳥か、黄金細工か、

第四連は火のイメージで描かれています。

鳥や黄金細工というよりは奇蹟、

星光りする黄金の梢に止まって、

冥府の雄鶏のように時を告げることができる。

また、ときには月光に苛立ち、

不滅の黄金の栄光のもと、

この世の鳥や花卉を、

泥や血の錯乱のすべてを声高く嘲笑する。

真夜中、皇帝の敷石の上を跳ぶのは

新から出るものでも、火打鉄で点火したものででもない炎、

嵐にも消えない炎、炎から生まれた炎、

血より生まれた霊はここにやってきて、

狂暴の一切の錯乱を残して

死して舞踏と化し、

恍惚の極み、

神ひとつ焦がすことのない炎の極み。

最終連では、精霊が現われ、それは肉体を離れたものとして描かれています。芸術家によってモザイクの中に描かれた精霊が肉体を越えて次から次へと現われます。

海豚の泥と血に打ち跨って、

精霊また精霊！ 鍛冶場はその潮を砕く。

皇帝の黄金の鍛冶場が！

優に、かの『大洪水』を止める力がある。

舞踏の床の大理石が打ち砕くのだ、

錯乱の苛烈な狂暴を

新しいイメージをさらに生み出す

数々のイメージを

海豚に引き裂かれ、銅羅に悩む海を。

イエイツはピザンティウムにたどり着いて、芸術上の真理を発見したのでしょうか。どうもそうではなさそうです。もし、真理を発見してしまえば、その後はもう詩作行為は必要がなくなるのですから。

(5)

一九二二年アイルランド自由国成立と同時にイエイツは上院議員に就任しました。初めから自由国には反対であったモードは、イエイツの行動を許しがたいものと考えました。同年、イエイツはトリニティ・カレッジから名誉博士の学位を授与されますが、モードにすればこれも恥知らずな行為でした。さらに、一九二三年にはノーベル文学賞を受賞します。イエイツは功なり名を遂げたのです。

イエイツは一九三九年一月二十八日、南フランスのキャップ・マータンのホテルで亡くなります。まさに第二次世界大戦が始まるうとしていました。彼の遺骸は故郷に運ぶことができず、ロクブリュヌの海を見渡す丘の上の墓地に仮に埋葬されました。

W・H・オーデンはイエイツの死を悼んだエレジー『W・B・イエイツを悼んで』を書いていきます。詩はこう始まります。

彼は冬の真只中に姿を消した。

小川に水が凍り、空港にはほとんど人の影もない、

雪は広場の彫像を醜くした。

死にゆく日の只中で水銀は沈下した。

あらゆる寒暖計は一致している

彼の死んだ日は暗い冷たい日であった。

第二連は、詩人オーデンが先輩詩人に語りかける調子で書かれています。

あなたも私たちと同じような愚かでした。でもあなたの天分はすべての愚かさを生きのびました。

金持ちの婦人たちの教区や、肉体の衰えや、

あなた自身を。狂ったアイルランドがあなたを詩にまで傷つけました。

今もアイルランドはその狂気を持ち、お天気だつて同じです。

なぜなら詩は何ものをも現象させることはないからです。

詩は詩の作りあげた谷間でいつまでも生きのび、

お役人たちもそこまで手出しする気は起しません。

忘れられた農場やひっきりなしの嘆きから

わたしたちが信じ、そこで死んでいく生なまな町から南に流れ

いつまでも生きのびます。一つの口を、一つの現象となつて。

最後の第三連は

大地よ、榮譽ある客人を受け入れてください。

ウイリアム・イエイツは長い眠りに落ちました。

アイルランドの器であるイエイツを

その詩を空っぽにしてください。

・
・
・

詩人よ、追いかけてよ

夜のどん底までひたすらに追いかけてよ。

あなたが静かな声で

われわれに歓喜の道を説いてください。

歌の畑に鋤を入れ

呪いから葡萄畑を作りだし、

人間の蹉跌を

悲嘆の歓喜で歌いあげてください。

心臓の荒野のなかに

恵みの泉を湧き出させ、

自由なる人に日々の牢獄のなかで

讚美の道を教えてください。

一九四八年九月イエイツの遺体は軍艦によって運ばれ、アイルランドに帰ります。逝去してから九年目でした。亡骸はスライゴの墓地、「むきだしのバルベン山の峰の下」にあるドラムラムに埋葬されました。私も墓参りをしてきましたが、墓はとても質素なものです。

Cast a cold eye

On life, on death.

Horseman, pass by!

冷厳な眼を

生と死に投げて、

行け、馬を駆ける者よ!

墓にはこの三行が墓碑銘として刻まれています。これで今日の話を終わらせていただきます。

(付記) 本稿は「学習院の秋の講座(一九九九年)」(学習院生涯学習センター)での「アイルランド 文化と歴史」における講義に加筆したものである。本企画を主宰され、小生を講師メンバーに加えてくれた橋本楨矩教授に感謝します。

(英米文学科 教授)